2020.11.11

学術会議

小嶋祥三

学術会議の会員の任命問題で、国会がもめている。わたしも一応大学の教員で、研究者だったのだが、学術会議には興味がなく過ごしてきた。どのような人が会員なのか知らなかった。恐らく、多くの大学の教員も同じではなかろうか。取り組んでいる研究テーマの方が面白かったのだ。

しかし、この機会に会員についてネットで調べてみた。きちんと調べていないが、第 20, 22, 23, 24 期（平成 17-32 年度？）の名簿はみることができた。第 19, 21 期は見当たらなかった。この HP で取り上げた松沢哲郎はこの種のものが大好物と思われるので、恐らく会員だろうと推測していた。すると、見ることができた名簿のすべてに彼の名前があった。任期は 6 年間だと思ったが、再認が可能なのか、ずいぶんと長い期間、会員だったことになる。

それはそれとして、わたしは名簿の中に松沢の周辺の人物を何人か見出した。今回の京大霊長研と野生動物研究センターの研究費の件では、3 人の教授と 1 人の特定准教授の不正が明らかになったが、この 3 名の教授はすべて学術会議の会員だった。そのうちの 1 名は准教授で会員になっていた。准教授が会員になるのは、非常に少ない。この他にも松沢に近い人物が複数名いた。

会員は、現会員が推薦するシステムのようだ。わたしは会員の経験がないので推測するのだが、長い間会員だった松沢には、多くの人を直接、間接的に推薦する機会があったと思う。このようなシステムでは、会員の意向が強く反映される。会員が全体を見て、適切に人選すれば問題ないだろうが、偏った判断が通りやすい制度だ。政治家は会員が「既得権」持つことになると批判しているようだが、このような振舞いをする会員がいれば、批判は当たっていないとは言えないだろう。会員が襟を正すべき点もあると思う。会員の選出に透明性がないと、政治の介入を許す一因となるだろう。